



# 南都佛教

第 83 號

南都佛教研究会  
東 大 寺

2003

INBUDS DB

<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/INBUDS/sea>

INBUDS 検索語入力欄:

20件ずつ

[D] タ

## 論文情報

名前	赤羽 律 (あかはね りつ) 著
タイトル	年代確定の指標としてのavicāraikaramanīya
タイトル読み	ねんだいかくていのしひょうとしてのavicaraikaramaniya
サブタイトル	
タイトル(欧文)	On the Value of avicāraikaramanīya as an Indicator to Establish the Date
サブタイトル(欧文)	
該当ページ	33-59(L)
媒体名	南都仏教 052 / 142
通号	83
ISSN	0547-2032
編者	南都仏教研究会
発行者	東大寺図書館
発行地	奈良
本文	-

## キーワード:

地域	インド
時代	8世紀
分野	インド仏教 中觀派
人物	ジュニヤーナガルバ
文献	二諦分別論
術語	avicāraikaramanīya 年代確定

る。NBhū 220.2-3: evam sati pariśeṣān mānasam pratyakṣam vyāptigrāhakam na vaktavyam, pariśesasyāsiddhatvāt. 「そうであるならば、残余法（それしか可能性として残っていないこと）に基づいて『意知覚が遍充把握者だ』と言うべきではない。[他にも可能性はあるので] 残余法〔自体〕が不成立だからである。」他学派からの批判においても、「〔やむを得ず意知覚を想定するより〕他に仕方がある」(註47)とするシャーリカナータの意図も同様である。

\*草稿の段階から多くの助言を頂き、筆者との対話に貴重な時間を割いてくださった稻見正浩先生に感謝します。

(かたおか・けい 東京大学東洋文化研究所助手)

## 年代確定の指標としての

avicāraikaramaṇiya

赤羽律

### 1. 本論の目的

8世紀のインドにおいては、数多くの著名な中観論者が輩出されインド仏教史における佳境を迎えたことは有名である。しかしその一方で、この時代に現れた中観論師達の年代論に関しては、若干の人物を除いては依然としてはっきりしないことが多いのも事実である。そうした中で「考査されない限り喜ばしいもの(avicāraikaramaṇiya)<sup>(1)</sup>」(以後〈表現〉と呼ぶ)と「離一多性を証因とする無自性論証」(以後〈推論式〉と呼ぶ)という二つの表現の有無を判断材料として、Śrigupta, Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla という四人の中観論師の年代関係に言及している松本史朗氏と小林守氏の意見は注目に値する。<sup>(2)</sup>何故なら、もし両氏が主張するようにこれら二つの表現を年代確定の指標として用いることが出来るのであれば、この年代に活躍した他の論師達の年代論についてもそれを用いることによって言及できるからである。この〈表現〉と〈推論式〉という二つのうち、〈推論式〉については、その重要性がかねてから指摘されており、江島[1980] (pp.211-258)、小林[1989]、森山[1997] などにおいて既に数多く考査されていることから、その成立に関しては比較的明らかにされているといえる。それに比して、〈表現〉に関しては具体的な考察が欠けているというのが実情である。それ故に、この論文においては特に〈表現〉を中心に取り上げ、この〈表現〉が一体何時ごろ、どの様にして使われるようになったのかを出来る限り明確にしたいと考えている。また、その考察を通じて仮定的にではあるが Avalokitavrata の活躍年代についても言及を行いたい。

### 2. Jñānagarbha の著作の問題

チベット伝承上、8世紀に活躍したと考えられている中観論者はその活躍年代順に Śrigupta, Jñānagarbha, Śāntarakṣita, Kamalaśīla として知られている。<sup>(3)</sup>しかし、松本氏は「これらの論師うち〈表現〉と〈推論式〉を自らの著作の中で用いていないのが Jñānagarbha だけである」という点に基づき、Jñānagarbha がこれらのうちで最初に活躍した人物であると想定し、Jñānagarbha → Śāntarakṣita → Kamalaśīla → Śri-

年代確定の指標としてのavicāraikaramaniya (赤羽)

gupta という年代論を提出している。<sup>(4)</sup> 言い換えれば、これは本論文で扱う〈表現〉を仏教論書において初めて用いたのは Śāntarakṣita であるということを意味している。しかし、これは確かであろうか。その点を以下に確認していきたい。

まず、ここで松本氏が〈表現〉の有無を考察した Jñānagarbha の論書とは Satyadvayavibhaṅgavṛtti (SDVV) のみであると思われるが、実際には Jñānagarbha の著書とされている論書は、チベット大藏經中に 9 編存在していることが長沢実導氏によって指摘されている。さらに松本[1978] (pp.109-113) において、Jñānagarbha という人物が少なくとも三人は存在したことが論証されているが、松本氏は、SDVV の著者である Jñānagarbha の著書がその 9 編のうちどれであるかを確定することは難しいとして、同論文中 (p.113) において著作の確定に関する判断を留保している。このことは、SDVV の著者である Jñānagarbha には SDVV とは別の著作が存在し、その著書の中に〈表現〉が存在する可能性も捨てきれないということを意味している。それ故に最初に、現存するチベット大藏經中に存在する Jñānagarbha 作と伝えられる著作のうちで、SDVV の著者である Jñānagarbha の著書を全て確定し、その何れにも〈表現〉が用いられないことを証明する必要がある。

そこで、翻訳官 Jñānagarbha を SDVV の著者とは別人であるとして除外すると、SDVV の著者である Jñānagarbha が書いた論書と想定されるのは、三編の著書と六編の注釈書ということになる。これらの注釈書のうち、Caturdevatāpariprcchātīkā (CDPT) と Guhyasamājatīkā (GT) とは、三人いると考えられている Jñānagarbha のうち 10~11 世紀頃に活躍し、Mar pa に Guhyasamāja を伝えたとされる密教僧 Jñānagarbha の著作と考えられる。<sup>(6)</sup> また Śavasamskāravidhi (SSV) も密教部に属する数フォリオの小品であり、内容を見る限り SDVV の著者と同一人物による作品とは思われない。<sup>(7)</sup>

この他、『解深密經慈氏章注』(SAKBh) と Bhāvanāyogamārga (BYM) に関しては、両テキストとも翻訳者名が欠如していること、及び SAKBh に関しては、『Bu ston 佛教史』目録中のチベット撰述文献の中に同じ作品と疑わしいタイトル名を見出せることから、SDVV の著者である Jñānagarbha の著作であると考えるのは難しいと考えられている。さらに、BYM に関しても、これまで SDVV の著者である Jñānagarbha の作品であると見なされてきているように思われるが、『梵語仏典』(p.272-273) によると、その根拠は 8 - 9 世紀にかけて同種の「菩提心修習次第」の論書が数多く著作されたということ以外特にない。それ故に、SDVV の著者の著書であると現段階では断定できない。また仮にこれら両者が SDVV の著者である Jñānagarbha の作品であったとしても、これらの論書の中に〈表現〉も〈推論式〉も見出されない。

最後に残るのが、Āryānantamukhanirhāradhāraṇīvākyākārikā (ANDh) と Āryā-

年代確定の指標としての avicāraikaramaniya (赤羽)

nantamukhanirhāradhāraṇītīkā (ANDhT) である。これらについては既に Inagaki [1987] においてチベット語校訂テキストが発表されている。そこに付された論文の中で、同氏はこの両テキストを SDVV の著者である Jñānagarbha の著書であるという前提のもとで議論を進めている。この Inagaki [1987] には松本[1978]において、Jñānagarbha 三人説が提出された後にも関わらず、チベット大藏經中に現存する Jñānagarbha という中觀論者・密教僧・翻訳官を全て同一人物と見なしているという問題が存在する。そのためであろうか、この論書は Jñānagarbha に関する研究において積極的に取り上げられてこなかったように思われる。それでは ANDh と ANDhT は SDVV の著者である Jñānagarbha の著書であるのだろうか、或いはそうではないのだろうか。松本[1978]においてこれらが Jñānagarbha の著書として確定されなかった背景ははっきりしないが、この論書が密教の注釈書に含まれることから、密教僧の Jñānagarbha の作品であると考えられたのかもしれない。しかし、この両テキストの翻訳者として記されているのは Ye shes sde と Prajñāvarman であり、彼らの活躍年代の点からみて密教僧 Jñānagarbha による著作の可能性は排除されるであろう。また、Inagaki [1987] (pp.353-364) において、この論書が Abhisamayālamkārāloka (AAA) に引用されていることが指摘されていることから、SDVV の著者である Jñānagarbha の著作であると考えられるのである。さらに、今回この論文の執筆にあたり、この論書を調べた結果、稻垣氏は全く言及していないが、SDVV の中間偈と全く同じ偈が ANDh 中に少なくとも二つ、半偈のみのものが一つ用いられていることが判明した。しかも、全 19 章のうち、それらが用いられている章 (chapter 9 & 10) の ANDhT の内容は SDVV の内容とも重なり合い、中觀思想的な色合いの強い注釈がなされているのである。

そこで、SDVV と ANDh との間で共通に用いられている偈を挙げるなら、以下に示すとおりである。<sup>(9)</sup>

ANDh k°38ab & k°57ab (p.150 & p.161)	SDVV k°9cd (p.161)
dgag par bya ba med pas na //	dgag bya yod pa ma yin pas //
yang dag tu(du: k°38b) na dgag	yang dag tu na bkag med gsal //
	med mnong //
ANDh k°40 (p.151)	SDVV k°11a 直後の中間偈 (p.162)
de phyir de ni stong pa min //	de nyid phyir na de stong min //
mi stong ma yin yod med min //	mi stong ma yin yod med min //
mi skye ma yin skye min zhes //	mi skye ma yin skye min zhes //
bya ba la sogs bcom ldan gsungs //	de la sogs pa bcom ldan gsungs //
ANDh k°53 (p.160)	SDVV k°13 の後、最初の中間偈 (p.164)
rnam pa med pa'i shes pa yis //	rnam pa med pa'i shes pa ni //

年代確定の指標としての *avicāraikaramaniya* (赤羽)

yul la 'dzin par mi rung ngo //  
rnam pa tshad ma min phyir dang //  
mi rung phyir na cig shos min //

左右を比較してみれば一目瞭然であるが、これらはそれぞれ平行偈であると考えられる。それ故に、結果的に ANDh と ANDhT は、稻垣氏が考えたように SDVV の著者である Jñānagarbha の著書であると考えて問題ないであろう。

議論は幾分脇に逸れるが、ここで併せて確認しておかなければならない問題は、ANDh & ANDhT と SDVV の何れのテキストが先に作られたのか、という点である。これに関して確定的なことを言えるだけの証拠を筆者は現段階で得ていない。ただし ANDh & ANDhT が SDVV に先行した著作であると推測しうる根拠が一つ存在する。それは、上に挙げた ANDh と SDVV に共通する偈のうち最後の例である ANDh の k° 53 と SDVV の k° 13 の後最初の中間偈（以後これを〈中間偈 1〉とする）である。SDVVにおいて、この〈中間偈 1〉の直後に別の中間偈（以後、これを〈中間偈 2〉と呼ぶ）が続くのであるが、それは以下の通りである。

[1] gang phyir sna tshogs ngo bo ru //  
<sup>(10)</sup>  
snang ba can gyi dngos gcig la //  
rnam pa rnams bden ji ltar 'gyur //  
de yi gcig nyid nyams phyir ro // (SDVV: p.164, (2))

この〈中間偈 2〉は、Eckel 氏や松下了宗氏によって既に指摘されている通り、Dharmakīrti の *Pramāṇavārttika* (PV) III k° 357 • *Pramāṇaviniścaya* (PVin) I k° 49 に基づいていると考えられている。<sup>(11)</sup>このことは、以下に挙げる PV III k° 357 を見ると明らかである。

[2] de lta min na sna tshogs kyi //  
ngo bor snang can dngos gcig la //  
rnam pa ji ltar bden 'gyur te //  
gcig pa nyid de nyams phyir ro // (PV III k° 357)  
<sup>(12)</sup>

「もしそうでないならば、相互に異なった相を顕現する諸々の形相が、どうして一  
者なるものに真実に存在するであろうか。何故ならば、その一性を失うから」

一方、〈中間偈 1〉と同じ偈である ANDh の k° 53 に対する ANDhT の注釈中には次  
の様な偈が引用されているのである。

[3] gzhan du na ni dngos po gcig //  
sna tshogs tshul du snang ba dag //  
de yi gcig pu nyams 'gyur phyir //  
rnam pa ji ltar bden par 'gyur //

年代確定の指標としての *avicāraikaramaniya* (赤羽)

zhes bya ba la sog pa 'byung ba'i phyir ro // (ANDhT: p.160)

これは ANDh の偈ではなく他の文献からの引用である。そして、稻垣氏が指摘しているように、これがまさに [2] として挙げた PV III k° 357 に相当するものであることは明らかである。つまり、ANDh の k° 53 と SDVV の〈中間偈 1〉とは同じで偈であるが、ANDhT において ANDh k° 53 を注釈する際に引用される偈は PV III k° 357 そのものであり、一方で SDVV の〈中間偈 1〉に続いて述べられる〈中間偈 2〉はその PV III k° 357 の偈に影響された偈なのである。この事実に基づく限り、Jñānagarbha は初め ANDh と ANDhT を著作した際に ANDh k° 53 の根拠として ANDhT において PV III k° 357 を引用し、その後著作した SDVV においてまず ANDh k° 53 を〈中間偈 1〉として引用し、続いてその k° 53 の注釈として ANDhT 中に引用した PV III k° 357 の偈を改変する形で自らの〈中間偈 2〉として引用したと考える方が妥当であろう。もし SDVV が先に著作され、その後 ANDh と ANDhT が著作されたのであれば、ANDh に引用されている SDVV の残り二つの中間偈と同様に、この〈中間偈 2〉も ANDhT における PV III からの引用としてではなく、初めから ANDh において通常の偈として書かれていている方が妥当である。それ故に、現段階では、ANDh と ANDhT とは SDVV の著者である Jñānagarbha による著書であり、SDVV に先行する著作であると想定しておきたい。それでは、ANDh と ANDhT に今問題としている〈表現〉が存在しているかどうかというなら、やはり存在していないのである。この事実も、ANDh と ANDhT が SDVV に先行するという事実を踏まえれば当然のことであろう。以上のことから、松本氏が主張したように、SDVV の著者である Jñānagarbha の著作、或いは著作の可能性がある全ての論書に〈表現〉は存在せず、Jñānagarbha はこの〈表現〉を知らなかっただ可能性が高いと言うことが出来るであろう。

### 3. Avalokitavrata と Śāntarakṣita による〈表現〉の比較

Śāntarakṣita に先行することが確認されている Jñānagarbha が〈表現〉を知らないのであれば、やはり Śāntarakṣita が〈表現〉を最初に用いた人物であると考えられそうであるが、実際にはそうではない。Śāntarakṣita 以前で〈表現〉を用いている論書として Avalokitavrata の *Prajñāpradipaṭīkā* (PPT) が存在することが、既に丹治 [1988] (p.214) において指摘されている。この論文の執筆あたり筆者が調査した限り、〈表現〉は PPT 中の二箇所で用いられているが、丹治氏によって指摘されているのはその内の一箇所のみであり、それは以下の通りである。

[4] ji ltar gzhan mu stegs can dag gis bdag dang bdag gir btags<sup>1</sup> pa dang sde pa  
gzhan dag gis gzung ba dang 'dzin pa'i dngos por btags<sup>1</sup> pa dang / rnam par shes  
pa tsam du smra ba dag gis / sems dang sems kyis rnam par btags<sup>1</sup> pa lta bu ma

yin gyi / theg pa chen po'i dbu ma pa'i tshul 'di la kun rdzob kyi tha snyad du ni  
 phyi dang nang gi rten cing<sup>\*2</sup> 'brel par 'byung ba ma brtags gcig pu na nyams dga' ba sgyu ma tsam du bya ba byed nus par yod cing de la mngon par zhen pas  
 ni srid pa gsum du 'khor zhing kun nas nyon mongs pa'i rgyun kyang 'brel par  
 'gyur la / de la mngon par ma zhen cing don dam par ngo bo nyid med par shes  
 pas ni srid pa'i sa bon 'gag cing mi gnas pa'i mya ngan las 'das pa'i bde ba chen  
 po yang thob pa med pa'i tshul gyis 'thob par 'gyur te / de ni / slob dpon Klu  
 sgrub kyi zhal snga nas dang / 'Phags pa lha dang / Legs ldan 'byed dang / Bud  
 dha pā li ta la sogs pa theg pa chen po dbu ma pa'i lam smra ba rnamshes  
 rab kyi pha rol tu phyin pa'i tshul bstan pa yin no //

(PPT: D za 84a6-b2, P[97] za 102b1-5) \*1 brtags: P \*2 rten cing: ad D  
 外教徒達によって「私」とか、「私の」と施設されたものや、他学派の者達による所取・能取というあり方として施設されたものや、識のみを語る者達によって心と心  
 によって施設されたものの如くではなく、大乗中觀のこの説明方法では、世俗の言語表現としては、(1)内と外の縁起、(2)考査されない限り喜ばしいもの〈表現〉、及  
 び(3)幻のみとして有効な作用をなす能力をもつものとして(もの)は存在し、それ  
 に執着することによって、三有に輪廻し、煩惱の相続にも結び付けられるのである  
 が、それに執着せず、勝義としては無自性であると知る者は、存在の種を滅し、不  
 住処涅槃の多いなる樂を、正悟しないというやり方で得るのであり、まさにこのこ  
 とが、老師 Nāgārjuna 足下、Āryadeva、Bhāviveka、Buddhapālita を始めとする  
 大乗中觀の道を語る者達による、般若波羅蜜多の方法の説示なのである。<sup>(14)</sup>

丹治氏はこのPPTの内容に基づいて、Avalokitavrataが世俗の特徴として次の三つを挙げていると指摘している。

- (1) 因縁生のもの
- (2) 〈表現〉
- (3) 幻のみとして有効な作用をなす能力を有するもの

さらに同氏は、この三つの世俗に関する特徴が以下に示す Sāntarakṣita の Madhyamakālambāravṛtti (MAV) k° 64 に述べられている世俗の三つの特徴と基本的に合致することを同論文 (pp.214-216) において指摘している。

[5] ma brtags gcig pu nyams dga' zhing //  
 skye dang 'jig pa'i chos can pa //  
 don byed pa dag nus rnamshes kyi //  
 rang bzhin kun rdzob pa yin rtogs // (MAV: k° 64, p.202)

「世俗とは (2)考査されない限り喜ばしいものであり、(1)生滅の特徴を有するもので

あり、(3)効果的作用の有能力なことを自性とするものである」<sup>(15)</sup>

この事実により、丹治氏は Avalokitavrata と Sāntarakṣita との間に思想的な繋がりがあったと推測しているのであるが、Avalokitavrata の活躍年代については未だ確定されておらず、これのみでは両者のうちどちらがこれら三つを世俗の特徴として最初に主張したのかは判然としない。しかし丹治氏は PPT と MAV k° 64 に挙げられた世俗に関する三つの特徴のうち(3)に関して、その内容が意味することは同義であるものの、Sāntarakṣita が arthakriyāsāmarthyā (don byed nus pa) というテクニカルタームを用いているのに対し、Avalokitavrata がそれを用いていないことから、Avalokitavrata が Sāntarakṣita に先行し、MAV における世俗の定義の成立に関して影響を与えた可能性を指摘したのである。<sup>(16)</sup> 筆者は、先に発表した『印仏研』掲載の論文 (以後「印仏研論文」)<sup>(17)</sup> において丹治氏のこの意見に賛意を示し議論を展開した。しかし現在、筆者はこの点に関して「印仏研論文」執筆の際に重要な点を見落としていたように思うので、以下にその点を指摘し「印仏研論文」における筆者の考え方を修正したい。

既に指摘したとおり、Avalokitavrata は丹治氏が指摘した上述の箇所とは別のもう一箇所でこの〈表現〉を用いているのであるが、それは以下の通りである。

[6] de dag gi ming ci skad bstan zhe na / skye ba'i rgyun zhes bstan te / des ni  
 skye ba'i kun nas nyon mongs pa'i mtshan nyid bstan to // de bye brag tu bshad  
 pa'i phyir las dang nyon mongs pas bskyed pa zhes bstan te / des ni las kyi kun  
 nas nyon mongs pa dang / nyon mongs pa'i kun nas nyon mongs pa'i rgyu las  
 byung bar bstan to // de'i ngo bo nyid bstan pa'i phyir sgyu ma dang smig rgyu  
 lta bu zhes bstan te / des ni ma brtags na dga' ba tsam du bstan to //

(PPT : chapter 11, D sha 245b6-7, P[97] sha 285b1-2)

それらの意味はどのように説示されるのか、というなら、「生じ続ける」と (PPrad に) 説示されており、それによって、生起する煩惱の特徴が意味されている。それを個別的に説明するために、「業と煩惱によって生じしめられた」と (PPrad に) 説示されている。これによって、業雜染と煩惱雜染という原因から生じると意味されているのである。その本性を示すために、「幻や陽炎の如き」と (PPrad に) 説示されているのであり、これによって、考査されなければ喜ばしいものに他ならないと意味されているのである。

ここで、Prajñāpradipa (PPrad) において書かれた「幻や陽炎」という二つの喻えが、Avalokitavrata によって〈表現〉という意味であると注釈されているのである。しかも、この引用部分の前後を見ても、〈表現〉は直接に世俗の定義と関係して述べられてはいないのである。要するに、ここで Avalokitavrata はこの〈表現〉を世俗の定義とは基本的には無関係に、「幻や陽炎の如きもの」に対する説明として用いているにすぎ

#### 年代確定の指標としての *avicāraikaramaniya* (赤羽)

ないのである。この点を踏まえてもう一度[4] の〈表現〉に関する箇所だけを[4'] として以下に引用する。

[4'] kun rdzob kyi tha snyad du ni phyi dang nang gi rten cing rten par 'byung ba ma brtags gcig pu na nyams dga' ba sgyu ma tsam du bya ba byed nus par yod cing ....

このチベット語訳に基づく限り、もとのサンスクリットテキストは長いコンパウンドになっていた可能性が高く、言葉と言葉がどのような格関係になっているのかを判断することは難しい。しかし、下線を引いた部分を[6] の下線部分と比べてみると、ここでの「考査されない限り喜ばしいもの」という〈表現〉は、その直後の「幻」(rgyu ma)を形容する形で用いられていると読んだ方が適切であるように思われる。つまり[4'] は、丹治氏の主張するように三つの特徴としてではなく「世間の言語表現において、外と内の縁起であり、考査されない限り喜ばしいものである幻のみとして有効な作用をなす能力を有するものとして存在し」と読むほうが妥当であろう。一方、[5] に挙げた MAV k° 64 で示される世俗の定義においては、〈表現〉は PPT に見られる「幻」という被修飾語句を欠き、明らかに独立した世俗の特徴として用いられているのである。

このように、〈表現〉は最初 *Avalokitavrata* によって PPT において世俗の特徴を表す比喩である「幻」の形容詞として用いられ、それが *Sāntarakṣita* によって「幻」という被修飾語句から独立せられ世俗の定義と呼びうるものにまで高められたと考えるのが妥当であろう。そして *Sāntarakṣita* が〈表現〉を世俗の定義として用いて以降、少なくとも仏教内部においては、この〈表現〉が中觀派の世俗の定義として認知されていったと考えられるのである。

#### 4. PPT における〈推論式〉の有無

ここで *Avalokitavrata* が *Sāntarakṣita* に先行することを確実なものとするために、PPT における〈推論式〉の有無について言及しておきたい。何故なら、既に示したように、〈表現〉の使用に関して、*Avalokitavrata* が *Sāntarakṣita* に影響を与えたのならば、〈推論式〉も PPT 中に存在し、同じ様に影響を与えた可能性があるからである。しかし実際には、PPT 中に〈推論式〉にあたるものを見出すことは出来ず、次のような文を見出すことが出来るのみである。

[7] nges par 'byung ba rjes su rtogs pa'i mtshan nyid ni gang zag dang chos stong par rjes su rtogs pa'i dmigs pa des nges par 'byung ba ste / rmi lam glog dang sprin lta bur // zhes bya ba'i dpe gsum gyis bsttan to // ① de la rmi lam gyi dpes ni 'das pa'i 'dus byas de dag bdag med pa rnam pa gnyis su rjes su rtogs pa bsttan to // ② glog gi dpes ni da ltar byung ba rnam gcig dang du ma'i rang bzhin dang

#### 年代確定の指標としての *avicāraikaramaniya* (赤羽)

mi ldan pas rang bzhin gzung du med pa'i phyir bdag med pa gnyis po de rjes su rtogs pa bsttan to // ③ sprin gyi dpes ni de'i sa bon gnas ngan len ma 'ongs pa'i bdag nyid sprin lta bus sems nam mkha' lta bu la 'bras bu skyed pa rnam gcig dang du ma'i rang bzhin dang mi ldan pas rang bzhin gzung du med pa'i phyir bdag med pa gnyis po de rjes su rtogs pa bsttan to //

(PPT: chapter 7, D sha 153a7-b3, P[97] sha 173b2-4)

「出離（解脱）を理解する特徴」とは、人法が空であることを理解する認識による出離であり、「夢・稻妻・雲の如くである」という三つの喻例によって (PPrad に) 説示されている。そのうち、①「夢の喻え」によって、過去の諸々の行為は（人法）二種類の無我であると理解することが示されている。②「稻妻の喻え」によって、今この瞬間に生じる諸物は一多の自性を備えていないから自性は把握されるものとしては存在しないから、二つ（人法）の無我であると理解することが示されている。③「雲の喻え」によって、その種、つまり将来の粗重を本性とする雲の如き種子によって虚空の如き心に生ぜしめられた諸々の結果は、一多の自性を欠いているから自性は把握されるものとしては存在しないから、二つ（人法）の無我を理解することが示されているのである。

PPT に見られる〈表現〉が MAV に影響を与えた可能性があるので対し、[7] に述べられた内容が MAV に用いられる〈推論式〉(MAV k°1)に直接影響を与えたと考えることは難しい。何故なら、文脈に相違が存在することに加え、ここでは「離一多性」を根拠に人法の二無我（無自性）を主張するという特徴は見出されるものの、MAV に見られるような〈推論式〉とはなっていないからである。つまり、*Avalokitavrata* は、離一多性を根拠に無自性を主張しようという意図を持ってはいたものの、MAV に見られるような〈推論式〉は知らないかったと考えられるのである。このことからも、彼が *Sāntarakṣita* に先行する人物であったことは確かであろう。

#### 5. *Candrakīrti* が用いる *avicāraprasiddha* という表現

*Avalokitavrata* が *Sāntarakṣita* に先行し、〈表現〉は *Sāntarakṣita* によって世俗の定義として用いられる以前に、*Avalokitavrata* によって「幻」(māyā) という喻えの修飾語として用いられていたことを確認した。それでは、*Avalokitavrata* はその着想を一体何処から得たのだろうか。以下にそれを確認する。そこで注目に値するのは、〈表現〉と同内容と思われる表現として「考査されずに世間一般に知られている」(*avicāraprasiddha; ma brtags par grub pa*) という表現が *Candrakīrti* の著書の中に存在するという松本氏や松下氏の指摘である。<sup>(18)</sup> 実際この〈表現〉は先に挙げた PPT の用例と同様に「幻」を説明するものとして、*Madhyamakāvatārabhāṣya* (MAvBh) において

て次のように用いられているのである。<sup>(19)</sup>

[8] cig car du brten nas 'byung ba ma brtags par grub pa sgyu ma lta bu yongs su gsal bar bya ba'i phyir te (MAvBh: p.97 ll.6-7)

同時に依拠して生じるものは、考察されずに世間一般に知られている幻の如くであると明らかにされるためであり、

この文脈自体は「世俗」の定義とは直接的には無関係であることから、Candrakirti がこの *avicāraprasiddha* という表現を Śāntarakṣita のように世俗の特徴として用いたわけではないことは明らかである。なおかつ、PPT に見られる[4] や[6] の例と同様に、この表現は「幻」という言葉を修飾しており、PPT と同一線上にある。さらに、11世紀頃に活躍したといわれる Jayānanda は MAvBh の注釈である *Madhyamakāvatāratāṭikā* (MAvT)において[8] を次のように注釈している。

[9] ma brtags par zhes bya ba ni ci ltar sgyu ma'i glang po la sogs pa med du zin kyang 'jig rten pa la glang po la sogs par mngon par zhen pa 'byung la / de bzhin du 'dir yang sa bon dang myu gu dag cig car skye ba med du zin kyang 'jig rten pa la rab tu grags pa'i yongs su ma brtags na nyams dga' ba cig car brten nas 'byung ba'i mngon par zhen pa la brten na Sā lu ljang pa'i mdo las sngar gyi dpe nye bar bkod pa yin pas skyon gang yang yod pa ma yin no zhes pa'o //

(MAvT: D 136a7-b2, P[99] ra 163b4-7)

「考察されずに」と (MAvBh に述べられたの) は、幻である家などが存在しないとしても、世間の者達には、家などと執着することが生じる。まさにその如くに、この場合にも種と芽とが同時に生じることが存在しないとしても、世間一般に知られている、つまり考察されないなら喜ばしいものであり、同時に依拠した後に生じるものに対する執着に依拠しているなら、『Śālistambha-sūtra』に、「以前のもの(種)を確立するものであるから、如何なる過失も存在するものではない」と述べられているのである。

このように、MAvBh に見られた *avicāraprasiddha* は MAvT において〈表現〉として言い換えられているのである。勿論、MAvT の成立時期がかなり後代のものであり、Candrakirti 自身が *avicāraprasiddha* を〈表現〉と同義としていたわけではないが、少なくとも後代においてその様に解釈される表現であったことは間違いない。この他にも Prasannapadā (PrasP) に次のような記述が見出される。<sup>(20)</sup>

[10] kim kāraṇam / ye svātmanā niḥsvabhāvā bhāvās te ca niḥsvabhāvā eva santo bālānām idam satyābhiniveśinām vyāvahārapatham upayānti avicāraprasiddhenāiva nyāyeneti teṣu nāsti yathoditavicāravatāro 'smākam / māyāsvapnagandharvanagarādīvat tu laukikāḥ padārthāḥ nirupapattikā eva santāḥ

sarvalokasyāvidyātimiropakrtamatinayanasya prasiddim upagatā iti paras-parāpekṣayaiva kevalam prasiddhim upagatā bālair abhyupagamyante / (PrasP: p.172 l.13 - p.173 l.2)

つまり、私にとっては無自性である諸物であるが、一方で「これは真実である」と執着する愚者達にとっては、まさに「考察されずに世間一般に知られている」論理によって、本来は無自性を本性とするその諸物が、言語表現の道へと至るのである。それ故に、私達には、これら(諸物)に関して、以前説かれたような吟味が働くことはない。しかし、世間の諸々の事物は「幻」や「夢」や「蜃気楼」などの如くに妥当性を欠いたものに他ならず、無明という眼病にかかった智恵の眼を有する全ての世間の者達にとって、遍く認められているのである。従って、相互に依存している愚者によって、(これらの諸物が) 遍く認められているということが、理解されるのである。

この PrasP の引用においては、*avicāraprasiddha* という表現は「論理」(nyāya) を説明しており、「幻」という喻えと直接に結び付いているわけではないが、内容上は、その直後に出てくる世間の諸物の喻えとしての「幻」などと関係していることがわかる。このように、Avalokitavrata が PPT 中において「幻」の形容として〈表現〉を用いたのは、直接的には同じように「幻」を修飾する *Candrakirti* の「考察されずに世間一般に知られている」という表現の影響であった可能性が強いように思われる。<sup>(21)</sup>

それでは、『中論』の注釈者として *Avalokitavrata* に先行し、*avicāraprasiddha* という表現を用いた *Candrakirti* は〈表現〉を知らなかったのだろうか。Candrakirti の代表作である MAvBh や PrasP には〈表現〉を見出すことは出来なかったが、Candrakirti 作とされる *Madhyamakaprajñāvatāra* (MPA) には〈表現〉が見出される。ところが、この MPA には関しては PrasP の著者である *Candrakirti* の真作説を疑う説が既に Ruegg [1981] (p.81) において提出されているのである。同氏が指摘するのは、この MPA というテキストの翻訳者に関して奥書に次のように述べられている点である。

[11] slob dpon chen po Zla ba grags pas mdzad pa rdzogs so // paṇḍita de nyid dang lo tshā ba 'Gos khug pa lha btsas kyis bsgyur ba'o // (D 349a6, P[98] ha 412a8)

大論師 *Candrakirti* によって著作された。パンディタである著者自身と翻訳官 'Gos khug pa lha btsas によって翻訳された。

この様に、著者である *Candrakirti* 自身が翻訳者の一人として翻訳に関わっていることから、MPA の著者が PrasP の著者と同一人物の可能性はありえない。さらにここで挙げられているもう一人の翻訳官は 11 世紀に活躍した有名な人物である。その他、この MPA には〈表現〉に加え Śāntarakṣita によって初めて用いられたと考えられてい

る〈推論式〉が用いられているのである。これらのことから、この MPA が著作・翻訳された時代が 11 世紀ごろであり、*PrasP* の著者とは同名異人の手による作品であると確定されるのである。<sup>(23)</sup> それ故に、やはり *PrasP* の著者たる *Candrakirti* は〈表現〉を知らなかつたと考えてよいであろう。

#### 6. PV の注釈文献に見られる中觀派の世俗の対象と〈表現〉

以上の考察により、*Candrakirti* が活躍していた 7 世紀前半には〈表現〉は世俗の定義であれ、それ以外であれ、全く用いられておらず、活躍年代が確定していないが *Candrakirti* 以降の人物であると考えられる *Avalokitavrata* がこの〈表現〉を仏教文献において初めて用いたと言えるのである。そして〈表現〉を世俗の特徴として初めて用いたのは 8 世紀に活躍した *Sāntarakṣita* であったという点には既に確認したとおりである。このことをより確実なものとするために注目に値するのが PV の注釈文献である。何故なら、PV III の k° 3 & k° 4 の世俗有と勝義有の解釈を巡って、中觀論者や PV の注釈者達の間で議論が交わされたことが諸研究者によって指摘されており、<sup>(24)</sup> *Sāntarakṣita* 以降、世俗の特徴として用いられるようになったと考えられる〈表現〉に関しても、これら PV の注釈文献の中に見出されると考えられるからである。そこでまず PV の注釈文献のうち、*Śākyabuddhi* (ca.660-720)<sup>(25)</sup> の *Pramāṇavārttikatikā* (PVT) を取り上げる。そこでは中觀派の理解する世俗の対象について次のように挙げられている。

[12] gang kun rdzob kyi don 'ma brtags pa'i shes' don yin nam / sgyu ma'i don yin nam / 'jig rten la grags pa'i don yin par smra'o zhe na /<sup>(26)</sup>

(PVT: D 155a3-4, P[131] ūe 191b2)

(中觀派が主張する) 世俗の対象とは、「考査されない知の対象」であるのか、或いは「幻の対象」であるのか、或いは「世間一般の認識の対象」であると言うのか、というなら、

この PVT の記述によって、700 年ごろ PV の注釈家達に知られていた中觀派の世俗理解が、「考査されない知の対象」「幻の対象」「世間一般の認識の対象」という三つであったことが分かるのである。一方、*Sāntarakṣita* 以降、800 年頃活躍したと想定されている *Prajñākaragupta* の *Pramāṇavārttikālambikā* (PVA) には、この *Śākyabuddhi* による中觀派の世俗理解に対して反論が次のように提示されている。

[13] yad apy uktam / *avicārapratītyartha* iti / \*vicārah pramāṇam<sup>(27)</sup> ucyate / na vikalpakaṁ vijñānam / tato 'pramāṇapratītyartha ity arthaḥ / \*māyārtho 'py ayam<sup>\*</sup> eva lokapratitīyartha iti / *avicāritaramanīyā* lokapratitīs tato na do-sah / (PVA: p.185 ll.25-27) \*māyārthopyathayam in Text

「(世俗の対象とは)『考査されない認識(知)の対象』であると述べられたことも、「考査」とは「正しい認識手段」のことであると述べられたのであり、「分別知」のことではない。それ故に、(「考査されない認識の対象」というのは)「正しい認識手段でない認識の対象」という意味である。『幻の対象』も同様なものに他ならず、『(世俗の対象とは)世間一般の認識の対象である』ということについては、「世間一般の認識」とは「考査されないなら喜ばしい」ということであり、それ故に、なんら過失は存在しない」

ここで *Prajñākaragupta* は、[12] において *Śākyabuddhi* が中觀派の理解する世俗の対象として挙げた三つ、即ち「考査されない知の対象」「幻の対象」「世間一般の認識の対象」について、一つ一つ反論を提示しているのである。まず、「考査されない知の対象」という表現については、「考査」の意味が「分別」の意味ではなく「正しい認識手段」の意味であると説明している。それ故に「考査されない知の対象」とは「正しい認識手段ではない知の対象」と理解し、次に「幻の対象」もそれ、即ち「考査されない知の対象」と同様の意味であるとしている。そして最後に「世間一般の認識」については、〈表現〉という意味であると説明しているのである。これによって、「考査されない認識の対象」 = 「幻の対象」であり、「世間一般の認識」 = 〈表現〉であるという理解が PVA において示されているのである。<sup>(28)</sup> つまり、PVA に先行する他の PV の注釈書である *Devendrabuddhi* (ca.630-690)<sup>(29)</sup> の *Pramāṇavārttikapañcikā* (PVP) や *Śākyabuddhi* の PVT においては、この〈表現〉は世俗の特徴として知られておらず、800 年ごろ活躍した *Prajñākaragupta* までの約一世紀の間に〈表現〉は中觀派が主張する世俗の特徴として広く知られるようになり、「世間一般の認識」(PVT) = 〈表現〉(PVA) と理解されるようになったと考えられるのである。そしてまさにこの一世紀の間に *Sāntarakṣita* が存在し、既に見たように MAV の中で〈表現〉を世俗の定義として用いたのである。この事実は、*Sāntarakṣita* が〈表現〉を世俗の特徴として初めて用いた人物であるということを明らかに指し示している。

#### 7. PVT に見られる中觀派の世俗理解の根拠

そこで、以上のように〈表現〉が「世間一般の認識」(lokapratiti / 'jig rten la grags) と同義であると PVA において見なされるのであれば、PVT に示されているように「世俗の対象とは世間一般の認識の対象である」と述べた中觀論者は一体誰であったのかを確認する必要があるだろう。世俗を「世間一般の認識の対象である」と表現する代表的な人物としてすぐに思い浮かぶのは *Candrakirti* であろう。実際、MAvBh の中に「世間一般の認識」は次のように示されている。

[14] rgyu dang 'bras bu'i dngos po 'jig rten la grags pa 'di ni yod pa nyid do //

(MAvBh: p.207 l.20)

因果的な事物は世間一般の認識（の対象）であり、これは存在するものに他ならないのである。

この様に、Candrakīrti によって「世間一般の認識（の対象）」は「因果的な事物（依他起的な存在）」と結び付けられていることが分かるのである。これは既に見た PPT ([4]) や MAV ([5]) の世俗解釈とも一致することから、MAvBhにおいてこの表現が世俗の意味と積極的な関係を有するものであったと理解して問題ないであろう。ただし、この表現自体は決して *Candrakīrti* の専売特許であったわけではない。後に先行する *Bhāviveka* の *Prajñāpradipa* (PPrad) にも以下のような例が見出される。

[15] 'di ltar bcom ldan 'das kyis kyang / gang 'jig rten la yod par grags pa de  
nga<sup>(30)</sup> yang yod par smra'o // gang 'jig rten la med par grags pa de nga yang med  
par smra'o zhes ji skad gsungs pa lta bu'o //

(PPrad: D 189a5-6, P[95] tsha 236a7-8) \*<sup>1</sup> om.: P  
つまり、世尊にとっても、『世間一般において存在すると認識されているものは、私も存在すると述べるのである。世間一般において存在しないと認識されているものについては、私も存在しないと述べるのである』と説かれている如くである。

ただし、*Candrakīrti* にとって、この「世間一般の認識」という表現が世俗の意味と密接な関係があるのに対し、*Bhāviveka* の PPrad や *Tarkajvālā* (TJ) では、この表現は主に對論者による排撃の一つとして用いられていたと思われる。それ故に、PVTにおいて取り上げられたこの「世間一般の認識の対象」という世俗の対象は、*Candrakīrti* にその起源を求めることが出来るかもしれない。

それでは、PVA で「幻」と同義とされる「考察されない知」(*ma brtags pa'i shes / avicārapratīti*) という表現は一体誰が世俗の特徴として主張したのであろうか。筆者は寡聞にして *ma brtags pa'i shes* というチベット語訳を他に知らないが、このチベット語訳から想定されるサンスクリットは *avicārapratīti* であり、このサンスクリットからは、*ma brtags na grags* 或いは *ma brtags par grags* 等といった別のチベット語訳を想定しうる。そしてこの表現ならば MAvBh や TJ の中に見出されるのである。以下に MAvBh と TJ に見出される例を一つづつ挙げる。

[16] gang gi phyir 'jig rten gyi kun rdzob 'di de ltar rnam par dpyad pa na yod  
par mi 'gyur zhing ma brtags par grags pas yod pa de nyid kyi phyir rnal 'byor  
pas rim pa 'di nyid kyi 'di la rnam par dpyod pa na ches myur ba kho nar de kho  
na nyid kyi gting dpogs par 'gyur ro // (MAvBh: p.279 ll.1-5)

この世間世俗はその様に吟味されるなら存在するものではないが、考察されずに認識されているものだから存在するのである。それ故に、瑜伽行者はこの順番通りに、

これについて吟味を為すなら、最も素早く真実の深遠を知ることになるだろう。

[17] bden pa gnyis la brten pa yi // zhes bya ba la / kun rdzob la brten pa'i rten  
cing 'brel par 'byung ba ci lta bu zhe na / ma brtags na grags pa yod pa dang med  
pa la sogs pa brtags na med pa / rgyu dang rkyen tshogs pa las byung ba'i  
mtshan nyid de / (TJ: D 52b7-53a1, P[96] dsa 56a6-7)

(MH に述べられた)「二諦に依拠して」ということについて、世俗に依拠した依他起とはどの様なものであるのか、というなら、考察されずに認識されている「有」や「無」などは考察されるなら非存在なものであり、因縁の集まりから生じることを特徴とするものである。

[16] と[17] に挙げた「考察されずに認識されているもの」という表現が用いられている内容は基本的に同じであると考えて問題ないであろう。そして、この「考察されずに認識されているもの」という表現は MAvBh よりも TJ に多く見出され、どちらかといえば TJ に特徴的な表現にも思われる。<sup>(34)</sup>さらに、[14] の「世間一般の認識（の対象）」という表現と同様に、この[15] に挙げた「考察されずに認識されているもの」という表現も「依他起」の特徴として述べられているのである。この事実に基づくならば、PVAにおいては別々に説明されている「世間一般の認識の対象」と「考察されない認識の対象」という二つの表現が意味する所は、中觀派にとって実質的には同じものであった可能性は十分にある。実際、そのことは[14] に関する MAvT の次の様な注釈にはっきりと現れている。

[18] des na ma brtags par grags pa'i rgyu dang 'bras bu la sogs pa 'jig rten pa'i  
dngos po rnams yod pa yin no zhes pa'o // (MAvT: D 277a7, P[99] ra 331b6-7)  
それ故に、考察されずに認識されている因果関係にある事物など、世間の諸々の事物は存在するものである、というのである。

ここで Jayānanda は[14]において「世間一般の認識」と表現されていた部分をそのまま「考察されずに認識されている」と言い換えており、このことは「世間一般の認識」=「考察されずに認識されている」ということを意味している。さらに[13]において「幻の対象」は「考察されない認識の対象」と同じであると述べられていることから、「考察されない認識の対象」「幻の対象」「世間一般の認識対象」というこれら三つの表現は PVAにおいて別々に注釈されていたが、実際には中觀派の文脈において同一の意味内容として理解される可能性を有しているものだったと言いうことが出来る。それにも関わらず PVAにおいて別々なものとして述べられたのは、恐らく PVTにおいて三つに分けられて説明されたことに対応していたにすぎないと考えられるのである。

この様に 700 年ごろに活躍したと考えられている Śākyabuddhi によって示された中觀論者が主張する世俗の意味である「幻の対象」「世間一般の認識の対象」「考察されな

い知(認識)の対象」という三つは、その典拠を *Bhāviveka* や *Candrakīrti* に求められ、これらは中觀派の文脈においては全て同一であると理解されうるものであったということが明らかになったのである。

### 8. *Jñānagarbha* の世俗の意味

さて、PVAにおいて同じ意味であるとされた「考察されない認識の対象」と「幻の対象」いう二つの表現は、*Sāntarakṣita* の弟子であり 8 世紀に活躍した *Kamalaśīla* (ca.740-795)<sup>(35)</sup> の *Madhyamakāloka* (MĀ) の後主張に引用される唯識論者の反論中に次のように示されている。

[19] dbu ma pa rnam kyang ngo bo nyid gsum rnam par gzhag pa khas mi len pa ni ma yin te / gzhān du na mthong ba la sogs pa dang 'gal ba ji ltar spongs par 'gyur / de la dngos po ma brtags na grags pa ji ltar snang ba sgyu ma bzhin du brten nas byung ba gang yin pa de ni gzhān gyi dbang gi ngo bo nyid yin no //  
(MĀ: D 150a3-4, P[101] sa 162b5-7)

中觀派の者達も、三性を確定することを応諾しないことにはならない。そうでない(三性を応諾しない)なら、知覚等と矛盾することをどうして排除できようか(排除できない)。その場合、依他起性とは、考察されずに認識されているものであり、顕現するがままのものであり、幻の如きものに依拠して生じるものに他ならない。

ここで先の PVA の内容と同様に「考察されずに認識されているもの」と「幻」という表現が依他起の特徴として同一の価値を有していることが分かるが、その二つと並立てて「顕現するがままのもの」という表現が存在する。これは、8 世紀前半頃に活躍したと考えられている *Jñānagarbha* によって用いられた世俗の定義であり、*Jñānagarbha* は「顕現するがままのもの」という表現を SDVV 中において世俗の特徴として次のように述べるのである。

[20] ji ltar snang bzhin ngo bo'i phyir //  
'di la dpyad pa mi 'jug go // [k° 21ab]  
ci ste kun rdzob ni ji ltar snang ba bzhin yin te / de la ni ji skad bshad pa'i dpyad pa'i gnas med pa nyid do // (SDVV: p.175 ll.7-10)

『顕現するがままのものであるから、これ(世俗)については吟味が働くかない』  
実際に世俗は顕現するがままのものであり、それに関して既に述べたような吟味が働く根拠は存在しない。

この様に、*Sāntarakṣita* に先行し、世俗の定義としての〈表現〉を知らない *Jñānagarbha* は世俗を「顕現するがままのもの」と規定するが、その際「世俗には吟味が働くかない」と述べるのであり、これは既に見てきた一連の *avicāra* を特徴とする世俗定義

と同一線上に存在していることが分かる。また *Jñānagarbha* によるこの「顕現するがままのもの」という世俗の定義が〈表現〉と同一内容のものであることは、*Sāntarakṣita* の注釈 *Satyadvayavibhaṅgapañjikā* (SDVP) に以下のように述べられていることからも明らかである。

[21] ji ltar snang bzhin ngo bo'i phyir // zhes bya ba ni / ma brtags na nyams dga' ba yin pa'i phyir ro // (SDVP: D 38b6, P[100] sa 31a7)

『顕現するがままのものであるから』ということは、「考察されないなら喜ばしいものだから」という意味である。

### 9. 〈表現〉の年代指標としての価値

以上のことより、この〈表現〉と「世間一般の認識の対象」「考察されない認識の対象」「考察されずに世間一般に知られているもの」「顕現するがままのもの」「幻」という五つの表現は、中觀派の文脈においては全て同一の内容である、或いは後代においては全て同じ意味であると考えられ得る可能性を有していた、と考えられるのである。そして、これらは時代の変遷と共に、その表現が変化していったものと考えられる。まず、「世間一般の認識」(lokapratiti) という表現が最も早い段階から見出されるものであり、その後 *Candrakīrti* の MAvBh, PrasP や *Bhāviveka* の TJ において「考察」との関わりを持って用いられた表現が「考察されずに認識されているもの」(ma brtags par grags pa / avicārapratiti)<sup>(36)</sup> であった。そしてその発展的な表現として *Candrakīrti* が MAvBh や PrasP で用いた表現が「考察されずに世間一般に知られているもの」(avicāraprasiddha) という表現であり、そのうちの一部が世俗の喻えである「幻」を形容する形で用いられていたのである。その後、Avalokitavrata が PPT において世俗の特徴として挙げられた「幻」という喻えの形容詞として「考察されずに世間一般に知られている」という表現の代わりに「考察されない限り喜ばしい」という〈表現〉を用い、その〈表現〉は最終的に *Sāntarakṣita* によって「幻」という喻えから切り離され単独に世俗の定義として使われることになったと考えることが出来るであろう。

既に見てきたように、この〈表現〉が世俗の定義として持ち込まれる時期が、中觀派内部におけるものと、PV の注釈文献に見られる中觀派説において、はっきりと 8 世紀中という点で一致することから、この〈表現〉は基本的には年代確定の指標としての価値を有するものであると考えられる。さらに仏教以外の文献で、やはり 8 世紀頃に活躍したと言われている Jaina 教徒である *Haribhadra Sūri* の *Anekāntajayapatākā* (AAJP) にもこの表現が見出されるのである。それ故に、〈表現〉が見出されるのは 8 世紀以降の文献においてであり、特に世俗の特徴として用いられているのは 8 世紀半ば以降の可能性が極めて高いということである。<sup>(37)</sup>

ただし、注意すべき点も存在する。それは、〈表現〉だけでなく、*Bhāviveka* や *Candrakīrti* によってほぼ定型化したと思われる「考察されずに認識されているもの」や「考察されずに世間一般に知られているもの」「世間一般の認識」というような表現も又、彼らより後代の人物である *Jñānagarbha* の SDVVにおいて全く用いられていないという点である。しかも[20]において示した如く、*Jñānagarbha* は世俗と「考察」の関係を知らなかったわけではなく、知っていたことは明らかであり、それにも関わらず、これらの定型表現を用いていないのである。それ故に、*Jñānagarbha* が現在確認できる限りの彼の論書において〈表現〉を使っていないことは確かであるが、本当に〈表現〉を知らなくて使わなかったのか、或いは知っていたにも関わらず使わなかったのかは軽々に断定できない。<sup>(38)</sup>さらには、*Jñānagarbha* が繰り返し述べる「顕現するがままのもの」という世俗の特徴も彼以前の論師が使用している例は私が知る限り見られず、彼以後も *Sāntarakṣita* や *Kamalaśīla* はその表現を用いるものの、それほど一般化したとは思われないのである。この点については、また別稿を期して考察を行いたいと考えている。さらには、AAJP 以外の非佛教文献においてもこの〈表現〉が存在する可能性は十分あり、この点の更なる調査も必要である。こうしたことから、〈表現〉は上述のように年代確定の指標として有用であるも、完璧ではない点を考慮に入れておく必要がある。

## 10. *Avalokitavrata* の活躍年代

そこで、この〈表現〉を年代確定の指標として *Avalokitavrata* の活躍年代を考えみたい。*Avalokitavrata* の活躍年代については、いまだ不明な点が多く存在するが、これまでに主に以下のような年代論が提出されている。

(1) 約 650 年説。これは梶山雄一氏によって、Kajiyama[1963] (p.39) と [1973] (p.162)において提出されたものである。同氏は、PPT に『中論』の注釈者の一人として *Candrakīrti* の名前は見出されるものの、*PrasP* の内容についての直接的な言及が見出されないことから、*Avalokitavrata* は *Candrakīrti* を『中論』の注釈者として名前は知っていたものの、*PrasP* の内容については知らなかったのではないかと考え、彼の活躍年代は *Candrakīrti* とほぼ同年代であろうと想定している。<sup>(39)</sup>

(2) 約 750 年説。これは羽田野伯猷氏によって提出されたものである。同氏は、*Avalokitavrata* の名前が *Tāraṇātha* 中に *Haribhadra* (ca.800) の約一世代前の人物として名前が挙げられていることを根拠としている。<sup>(40)</sup>

(3) 約 700 年説。これは江島恵教氏によって、江島[1980] (p.16)において PPT の内容に基づき推定されたものである。

既に見てきたように〈表現〉を年代確定の指標として用いるならば、*Avalokitavrata*

が 7 世紀に活躍したとは考え難いことから、(1) の梶山説は採用し難い。さらに 8 世紀半ば以降に活躍年代があることが認められている *Sāntarakṣita* との関係から、8 世紀前半を *Avalokitavrata* の活躍年代として想定するのがもっとも妥当であると思われる。さらに、*Jñānagarbha* は〈表現〉を用いていないことから、*Avalokitavrata* に先行し、なお且つ SDVV の中に *Devendrabuddhi* の PVP の内容に言及することから、700 年頃をその活躍年代と考えるのが妥当であるかもしれない。

最後に、*Srigupta* に言及しておきたい。彼は松本氏が指摘したように *Tattvāvatārvṛtti* (TAV) において確かに〈表現〉も〈推論式〉も用いている。さらに、TAV においてもやはり〈表現〉は世俗との関わりを持って使われているようにみえる。チベット伝承上、*Jñānagarbha* に先行し、恐らくは 7 世紀にその活躍の中心があったと思われる *Srigupta* が、同じく 7 世紀に著作され、中觀派の世俗理解についての言及も見られる PVP や PVT にその使用が全く確認できない〈表現〉を知っているというのは明らかに不自然である。それ故に、この〈表現〉の有無のみを判断材料とする限りにおいては、*Jñānagarbha* → *Avalokitavrata* → *Sāntarakṣita* → *Kamalaśīla* → *Srigupta* という年代関係を主張することが可能であろう。勿論、年代関係に関しては、この〈表現〉や〈推論式〉の使用の有無のみによって決定できるものでないことは当然のことである。それ故に、これはあくまでも仮定的な結論とすべきである。また、これまで *Sāntarakṣita* との関係から ca.700～760 年と推定されてきた *Jñānagarbha* の年代もそれ以上に確実な根拠が存在するわけではなく、松本[1980a]において推定されているように、*Devendrabuddhi*, *Sākyabuddhi* と *Jñānagarbha*, *Sāntarakṣita* の論難関係について、*Devendrabuddhi* ← *Jñānagarbha* ← *Sākyabuddhi* ← *Sāntarakṣita* という順番がもし本当に成立するのであれば、*Jñānagarbha* の年代についてもう一度検討される必要がある。

何れにしても、今後は *avicāra* を特徴とする表現の一つ一つの特徴を全て洗い出し、また他の思想的特徴も考慮に入れた上で、*Avalokitavrata* のみでなく、*Jñānagarbha* の活躍年代に関しても再考が必要であろう。

## 11. 結語

以上考察してきたことを次のように締めることで結語としたい。

(1) 〈表現〉が仏教文献において初めて見出されるのは *Avalokitavrata* の PPT である。ただし、PPT では〈表現〉は世俗の定義として用いられたのではなく、世俗の喻えである「幻」の形容詞として用いられたものである。また、その着想の原点は *Candrakīrti* の MAvBh に見られる *avicāraprasiddha* という表現であるという可能性が高い。

### 年代確定の指標としての *avicāraikaramaniya* (赤羽)

- (2) 〈表現〉を8世紀半ばに世俗の定義として初めて用いた人物は *Sāntarakṣita* であり、彼は PPTにおいて世俗の喻えである「幻」の形容詞として用いられていた〈表現〉を「幻」という喻えから切り離し、独立した世俗の定義として用いたと考えられる。
- (3) 〈表現〉は8世紀中に用いられるようになった特徴的な表現であり、特に〈表現〉が世俗の定義として用いられるのは、*Sāntarakṣita* 以降であると考えられる。これは非中觀派の仏教文献である PV の注釈文献、および非佛教文献である AAJP によっても確認される。それ故に、〈表現〉は基本的に年代確定の指標としての価値を有する。
- (4) 「世間一般の認識」「考察されない認識」「考察されずに世間一般に知られている」「顕現するがまま」と〈表現〉とは中觀派の文献において全て同一な意味を与えられているものである。さらにこれらは、おおよそこの順序で使われるようになり、〈表現〉はこれらの表現のうちで最後に現れたものである。
- (5) 〈表現〉と〈推論式〉の使用の有無のみに基づくならば、*Avalokitavrata* の活躍年代は8世紀前半ごろと推定され、*Jñānagarbha* はそれに先行する人物であり、700年頃に活躍した人物と推定される。

### 略記号

- AAA: *Abhisamayālamkārāloka* of Haribhadra, ed. by Wogihara[1973].  
 AAJP: *Anekāntajayapatākā* of Haribhadra Sūri, ed. by Kāpadiā[1947].  
 ANDh: *Āryānantamukhanirhāradhāraṇīvākyānakārikā* of *Jñānagarbha*, ed. by Inagaki[1987].  
 ANDhT: *Āryānantamukhanirhāradhāraṇītikā* of *Jñānagarbha*, ed. by Inagaki[1987].  
 BB: Bibliotheca Buddhica.  
 BCAP: *Bodhicaryāvatārapañjikā* of Prajñākaramati, ed. by Vaidya[1960], D 3872; P[100] 5273.  
 BhK III: *Third Bhāvanākrama* of Kamalaśila, ed. by Tucci[1971], D 3917; P[102] 5312.  
 BST: Buddhist Sanskrit Text.  
 BYM: *Bhāvanāyogaṁārga* of *Jñānagarbha*, D 3909; P[102] 5305.  
 CDPT: *Caturdevatāpariprcchātīkā* of *Jñānagarbha*, D 1916; P[66] 2779.  
 D: sDe dge edition.  
 E ed.: Eckel's edition of SDVV.  
 GOS: Gaekwad's Oriental Series.  
 GT: *Guhyasamājatikā* of *Jñānagarbha*, in Lalou[1933].  
 MĀ: *Madhyamakāloka* of Kamalaśila, D 3887; P[101] 5287.  
 MAP: *Madhyamakālamkārapañjikā* of Kamalaśila, D 3886; P[101] 5286.  
 MAV: *Madhyamakālamkāravṛtti* of *Sāntarakṣita*, ed. by Ichigo[1985].  
 MAvBh: *Madhyamakāvatārabhāṣya* of *Candrakirti*, ed. by Poussin[1907-13].  
 MAvT: *Madhyamakāvatāratīkā* of Jayānanda, D 3870; P[99] 5271.

### 年代確定の指標としての *avicāraikaramaniya* (赤羽)

- MH: *Madhyamakahṛdaya* of Bhāviveka, D 3855; P[96] 5255.  
 MPA: *Madhyamakaprajñāvatāra* of *Candrakirti*, D 3863; P[98] 5264.  
 MŚK: *Mūlasarvāstivādiśrāmanerakārikā* of Nāgārjuna, D 4127; P[127] 5629.  
 NBhū: *Nyāyabhbhūṣana* of Bhāsarvajñā, ed. by Yogindrānandah[1968].  
 NBTT: *Nyāyābindutīkātippaṇī* of unknown, ed. by Stcherbatatsky[1909].  
 P: *Peking edition*.  
 PPrad: *Prajñāpradīpa* of Bhāviveka, D 3853; P[95] 5253.  
 PPT: *Prajñāpradīpatikā* of *Avalokitavrata*, D 3859 wa 1-287a7 sha 1-338a7 za 1-341a7; P[96-7] 5259 wa 1-333a6 sha 1-394a5 za 1-406a8.  
 PrasP: *Prasannapadā* of *Candrakirti*, ed. by Poussin[1903-13], D 3860; P[98] 5260.  
 PV: *Pramānavārttika* of Dharmakirti, ed. by Miyasaka[1972].  
 PV III: *Pramānavārttika pratyakṣa chapter* of Dharmakirti, 戸崎[1985].  
 PVA: *Pramānavārttikālamkāra* of Prajñākaragupta, ed. by Sāṅkrtyāyana[1953], D 4221; P[132] 5719.  
 PVin I: *Pramānaviniścaya pratyakṣa chapter* of Dharmakirti, ed. by Vetter[1966].  
 PVP: *Pramānavārttikapañjikā* of Devendrabuddhi, D 4212; P[130-131] 5717.  
 PVT: *Pramānavārttikātikā* of Śākyabuddhi, D 4220; P[131] 5718.  
 SAKBh: *Sandhinirmocanasūtre Āryamaitreyakevalaparivartabhāṣya* of *Jñānagarbha*, ed. by 野沢[1957].  
 SDNS: *Sarvadharmaniḥsvabhāvasiddhi* of Kamalaśila, D 3889; P[101] 5289.  
 SDVP: *Satyadvayavibhangapañjikā* of *Sāntarakṣita*, D 3883; P[100] 5283.  
 SDVV: *Satyadvayavibhangavṛtti* of *Jñānagarbha*, ed. by Eckel[1987].  
 ŠPP: *Śrāmanapañcāśatkārikāpadābhismarana* of Kamalaśila, D 4128; P[127] 5630.  
 ŠSV: *Śavasamskāravidhi* of *Jñānagarbha*, D 1282; P[56] 2404.  
 TĀ: *Tattvāloka* of Kamalaśila, D 3888; P[101] 5288.  
 TAV: *Tattvāvatārvṛtti* of Śrigupta, D 3892; P[101] 5292.  
 TJ: *Tarkajvālā* of Bhāviveka, D 3856; P[96] 5256.  
 TSDsup vol 3: Tibetan-Sanskrit Dictionary supplementary, vol.3.  
 TSP: *Tattvasamgrahapañjikā* of Kamalaśila, ed. by Shastri[1968].  
 TSWS: Tibetan Sanskrit Works Series.  
 WZKM: Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes.  
 WZKS: Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens.  
 WZKSO: Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens.  
 『印仏研』:印度学仏教学研究.  
 『梵語仏典』:塙本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著『梵語仏典の研究 III 論書篇』平楽寺書店, 1990.

### 参考文献

- Eckel,M.D.[1987]: *Jñānagarbha on the Two Truth*, State University of New York Press.  
 Funayama,T.[2001]: "On the Date of Vinītadeva" *Serie Orientale Roma* 92-1, pp.309-325.  
 Frauwallner,E.[1937]: "Zu den Fragmenten buddhistischer Autoren in Haribhadras Anekāntajayapatākā" *WZKM* 44, pp.65-74.  
 [1961]: "Landmarks in the History of Indian Logic" *WZKSO* 5, pp.125-148.  
 Inagaki,H.[1987]: *The Anantamukhanirhāra-dhāraṇī Sūtra and Jñānagarbha's Commentary a Study and the Tibetan Text*, Nagata-Bunshodo.

年代確定の指標としての *avicāraikaramaniya* (赤羽)

- [1999]: *Amida Dhāraṇī Sūtra and Jñānagarbha's Commentary*, Ryukoku Literature Series 8.
- Ichigo,M.[1985]: *Madhyamakālamkāra*, Bun-eido.
- Kajiyama,Y.[1963]: "Bhāvaviveka's Prajñāpradipah (1.Kapitel)" WZKSO 7, pp.37-62.
- [1973]: "Affirmation and Negation in Buddhist Philosophy" WZKS 17, pp.161-176.
- Kāpadiā,H.R.[1947]: *Anekāntajayapatākā by Haribhadra Śūri with his own commentary and Municandra Śūri's supercommentary* Vol.1, GOS 88.
- Keira,R.& Ueda,N.[1998]: *Sanskrit Word-Index to the Abhisamayālamkārāloka Prajñāpāramitāvākhyā* (U.Wogihara edition), the Sankibo Press.
- La Vallee Poussin L. de[1903-13]: *Mūlamadhyamakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna*, avec la Prasannapadā commentaire de Candrakirti, BB 4, St.Petersbourg, (rep. Osnabrück, 1970; Tokyo, 1977).
- [1907-12]: *Madhyamakāvatāra par Candrakirti*, traduction tibétaine, BB 9, St.Petersbourg, (rep. Osnabrück, 1970; Tokyo, 1977).
- Lalou,M.[1933]: *Répertoire du Tanjur d'après le catalogue de P.Cordier*, Paris.
- Lokesh,Ch.[1993]: *Tibetan-Sanskrit Dictionary supplementary volume 3, Śatapitaka series indo asian literatures vol.372*.
- Miyasaka,Y.[1972]: *Pramānavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan)*, Acta Indologica vol.2.
- Obermiller,E.[1981]: *History of Buddhism (Chos-hbyung) by Bu-ston*, Materialien zur Kunde des Buddhismus 18 Heft, Heiderberg (rep. Tokyo, 1964).
- Qvarnström,O.[1999]: "Haribhadra and the Beginnings of Doxography in India" *Approaches to Jaina Studies: Philosophy, Logic, Rituals and Symbols, South Asian Studies Papers 11*, University of Toronto, pp.169-210.
- Ruegg,D.S.[1981]: *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India*, Wiesbaden, Otto Harassowitz.
- Sāṅkrtyāyana,R.[1953]: *Pramānavārttikabhāṣyam or Vārttikālamkārah of Prajñākaragupta*, TSWS vol.1.
- Shastry,S.[1968]: *Tattvasamgraha of ācārya Shāntarakṣita with the Commentary 'Pañjikā'* of Shri Kamalaśīla, 2 vols, Bauddha Bharati Series 1, Varanasi (rep. 1981).
- Stcherbatatsky Th.[1909]: *Nyāyabindutikātippaṇī tolkovanie na sochinenie Darmottara Nyāyabindutikā sanskritskij tekst s primiechani jami*, BB 11.
- Schiefer,A.[1968]: *Tāranātha de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione* (texte tibétain), Peteropoli, (rep. 1963 Tokyo).
- Szerb, J.[1990]: *Bu ston's History of Buddhism in Tibet*, der Österreichischen Akademie der Wissenschaften Philosophische-Historische Klasse Sitzungsberichte, 569, Wien.
- Tucci,G.[1971]: *Minor Buddhist Texts part III*, Serie Orientale Roma 43, Roma.
- Vaidya,P.L.[1960]: *Bodhicaryāvatāra of Śāntideva with Commentary Pañjikā of Prajñākaramati*, BST 12.
- Vetter,T.[1966]: *Dharmakīrti's Pramānaviniścayah*, 1.Kapitel: Pratyakṣam, Einleitung, Text der tibetischen Übersetzung, Sanskritfragmente, deutsche Übersetzung, Wien.
- Wogihara,U.[1973]: *Abhisamayālamkārāloka Prajñāpāramitāvākhyā*, Sankibo press.
- Yamaguchi,S.[1974]: *Index to the Prasannapadā Madhyamaka-vṛtti*, part one skt.-Tib.

年代確定の指標としての *avicāraikaramaniya* (赤羽)

- Heirakuji-shoten.
- Yogindrānandah S.[1968]: *Śrimad-ācārya-Bhāsarvajñapraṇītasya Nyāyasārasya svopajñam vyākhyānam Nyāyabhūsanam*, Vāranasi.
- 稻見正浩[2000]: 「astu yathā tathā」『インドの文化と論理 戸崎宏正博士古稀記念論文集』九州大学出版会。
- 稲葉正就[1963]: 「スムリティ著「言語の門」に説かれているチベット文法学」『岩井博士古希記念論文集』岩井博士古稀記念事業会, pp.68-79.
- 江島憲教[1980]: 『中觀思想の展開』春秋社。
- 久間泰賢[1995]: 「Jñānaśrimitra における arthakriyā一二論説に関する一』『仏教文化』33, pp.45-59.
- 小林 守[1989]: 「カマラシーラの離一多論証—『中觀明』試訳(下)一』『文化』53, pp.83-103.
- [1992]: 「シュリーグプタ作『真実への悟入』一和訳研究(上)一』『論集』19, pp.94-75.
- 丹治昭義[1988]: 「生即涅槃」『仏教思想』10 平楽寺書店, pp.135-249.
- 戸崎宏正[1985]: 『仏教認識論の研究(下巻)』大東出版。
- 長沢実導[1965]: 『大乗仏教瑜伽行思想の発展形態』智山勧学会。
- 生井 衛[1969]: 「西藏文『瑜伽修習道』和訳」『仏教学会報』2, pp.35-38.
- 野沢静證[1957]: 『大乗仏教瑜伽行の研究』法藏館。
- 羽田野伯猷[1952]: 「数論派における解脱論と数論偈」『印仏研』1-1, pp.164-171.
- [1958]: 「Tantric Buddhism における人間存在」『東北大学文学部研究年報』9, pp.1-79.
- 松下了宗[1984]: 「Satyadvayavibhangavr̥tti 研究をめぐる諸問題」『龍谷大学仏教文化研究紀要』23, pp.9-18.
- 松本史朗[1978]: 「Jñānagarbha の二論説」『仏教學』5, pp.109-137.
- [1980a]: 「仏教論理学派の二論説(上)」『南都仏教』45, pp.101-118.
- [1980b]: 「同上(中)」「同上」46, pp.38-54.
- [1981]: 「同上(下)」「同上」47, pp.44-62.
- 森山清徹[1997]: 「無自性論証における遍充関係と二論説一帰謬還元法と反所証拒斥検証一」『南都仏教』74 & 75, pp.1-29.
- 註
- (1) この表現の他にも、*avicāraramaniya* や *avicāritaramaniya* など、幾つかの類似表現が諸文献に見出されるが、これらは全て基本的に同義であることから、ここでは *avicāraikaramaniya* という表現をそれらの代表として扱う。この表現に関しては、チベット語訳として筆者が現段階で把握している使用例は主に三種類に分類され、次の通りである。
- ma brtags na nyams dga' ba  
 (テキスト名(デルゲ版の対応箇所: サンスクリット\*)] BCAP (190b4:avīcārapanya p.173 1.14), BhK III (60b2-3: avīcāraramaniya p.12 1.2), MAP (116b7, 118b3, 126a7), MAV (70a2-3), PVA (168b3\*, 171a4-5: avīcāritaramaniya p.185 1.26, 172a3: avīcāritaramaniya p.186 11.27-28, 241b5), SDVP (37a4-5, 38b6, 41b1), ŠSV (358a2), TAV (41b2), TSP (216a4: avīcāritaramaniya p.149, 1.17), MAvT (136b1, 162a6, 214b1, 230a4, 230a5, 232a1, 262b4-5, 262b7, 266a4, 266a7, 266b1, 266b3, 267a5, 267a7, 274a2, 275a6, 278b6, 279b4, 282b5, 291b6, 310a6)  
 ma brtags na dga' ba  
 PPT (sha 245b7), MĀ (198a5, 199b3, 223a7, 228b3, 233a4), MAV (74b4-5), SDNS (287a6), SDVP (39b3), TAV (42b5)

ma brtags gcig pu(bu) na dga' ba

MAP (86b5, 115a6-7), MAV (56b5, 65a3, 65a7), PPT (za 84a7), TAV (41b1), TĀ (271b7)

<sup>11</sup> サンスクリットが確認されるものに関してはそれを挙げたが、今回確認できなかったものに関しては、デルゲ版の対応箇所のみ指摘した。

<sup>12</sup> サンスクリットテキストに混乱が見られ、この表現に対応する文章が見当たらない。しかし、稻見氏によると、この部分については NBhū: p.518 1.7 にパラレルなテキストが存在し *avicāranapratityartha* となっていることが指摘されている。稻見 [200] pp.391-392, 35) 参照。上表の他には、次の様な表現も見出される。ma brtags gcig bu'i nyamas dga': MAV (70b6-7), ma brtags nyams dga' nyid: TAV (42a2), ma brtags rab tu dga' rnams: TĀ (270a5) また、AAA にも多数の例が確認されるが、その内容に関しては Keira & Ueda [1998] 参照。

(2) 松本 [1978] pp.112-113 と小林 [1992] p.94-89 参照。

(3) これら的人物のチベット伝承上における活躍順序に関しては、松本 [1978] pp.110-112 に詳しい。

(4) Śrigupta を Śāntarakṣita と Kamalaśīla 以後の人物であると考えるにあたり、筆者の理解に基づいて松本氏の根拠を纏めるならば、この他に次のような二つが存在する。(1) 最初期の『Bu ston 仏教史』(Obermiller [1931] chapter II p.135)においてのみ、Jñānagarbha と Śrigupta の順番が入れ替わっている。(2) TAV の内容は MAV の内容と酷似している上、MAV に比べてはるかに小さく、TAV の最後にはこの論書が何らかの著作の「備忘録」(brjed byang) であることが明示されている。この二つの根拠のうち、まず(1)によって Śrigupta が Jñānagarbha より後の人物であることが理解され、(2)に基づいて、TAV が MAV の「備忘録」であるとして Śrigupta が Śāntarakṣita と Kamalaśīla 以降の人物であると考えられている。それ故に、Jñānagarbha → Śāntarakṣita → Kamalaśīla → Śrigupta という年代論が推定されているのである。ただし、このうち(1)の根拠に関しては、『Bu ston 仏教史』の別の箇所には、Śrigupta → Jñānagarbha という順番で述べられており、これは根拠として成立しない。Obermiller [1931] chapter II p.190 を参照。また、(2)も確実な根拠といえるかはもっと詳しい吟味が必要である。例えば、brjed byang というチベット語を「備忘録」という日本語に直すと、確かに「備忘録」は元テキストよりも小さな作品であるような印象を受けるが、必ずしもそうでない可能性が存在する。例えば、Kamalaśīla 作とされる SPP という「備忘録」は Nāgārjuna 作とされる MŠK に対する注釈であるが、「備忘録」であるはずの SPP のほうが元のテキストである MŠK よりも大きな作品である。brjed byang がタイトルにつく作品については、TSDsup vol 3, p.675 参照。

(5) 長沢 [1969] pp.8-11 参照。正確に言えば、長沢氏が同書において挙げているのは 8 編のみであり、同氏は ANDh を ANDhT に含めて数えている。また、GT は現存するチベット大藏經には存在せず、その存在は Cordier 目録に見出される。Lalou [1933] p.13 & p.146 参照。この他、長沢氏は Jñānagarbha による翻訳文献も併せて 12 編挙げておられるが、既に松本 [1978] において、この翻訳者である Jñānagarbha は SDVV の著者である Jñānagarbha とは別人であるとされているので、ここではその理解に従う。

(6) 密教論者の Jñānagarbha については、羽田野 [1958] pp.19-28 参照。さらに、CDPT の翻訳官として名前が挙げられているのは、Smrtijñānakirti (Dran pa ye shes grags pa) という 10 世紀半ばに入蔵した人物であり、その伝記については『Bu ston 仏教史』ff.153b4 - 154a1 に見出される。それ故に、Jñānagarbha 作と伝えられる密教関係の注釈書は概してその頃に翻訳されたものであると言えるだろう。稻葉 [1963] p.68 及び Szerb [1990] pp.89-90 参照。

(7) このテキスト中に〈表現〉も〈推論式〉も見当たらない。

(8) 松本 [1978] p.113 参照。また、この注釈書の中には唯識思想が色濃く見出されることも注意されるべきであろう。この注釈書のテキストと和訳、内容の概観に関しては、野沢静證氏によるものが存在する。野沢 [1957] 参照。BYM に関しては長沢実導氏と生井衛氏による和訳研究が存在する。長沢 [1969] pp.155-172, 生井衛 [1969] 参照。

(9) これら共通な偶が見出される箇所の ANDhT の注釈部分には SDVV における注釈と同内容かつ同表現が見出される。例えば、ANDh の k° 57 に関する ANDhT の注釈部分に見られる mo gshan gyi bu'i sngo bsangs la sogs pa dgag pa bzhin no // (ANDhT: p.162 ll.12-13) という表現は、SDVV の k° 10ab 部分の注釈部分に見られる mo gsham gyi bu'i sngo bsangs nyid la sogs pa bkag pa bzhin no // (SDVV: p.161 ll.21-22) という文と、文脈・文章ともに同じである。両者の比較に関してはまた別稿を期したいと考えている。

(10) E ed. では bu となっているが、D に基づいてこの様に訂正する。

(11) Eckel [1987] p.129, com.60 参照。松本氏はこの偶を PV III k° 357 の直接の引用であると考えているが、SDVV においてはあくまでも中間偶の一つであって、引用された偶ではない。

(12) 戸崎 [1985] pp.43-44 (PV II. k° 358. Miyasaka [1972] pp.88-89), anyaikasya bhāvasya nānārūpāvabhāsinah / satyam katham syur ākārās tadekatvasya hānitah //; この偶は、次のように PV in I k° 49 にも見られる。gzhan du gcig gi ngo bo la // rang bzhin du mar snang ba yi // rnam pa ji ltar bden 'gyur te // gcig pa nyid de nyams phyir ro // (Vetter [1965] p.92 ll.13-16) 参照。

(13) 以後テキストの対応箇所に関しては、D と P を挙げるが、煩雑さを避けるため D を定本とし、問題がある場合のみ訂正し注記する。

(14) Candrakīrti と Avalokitavrata の年代関係に関しては幾つかの問題が指摘されている。例えば、PPT には中論の八大注釈家の一人として三回のみ Candrakīrti の名前が見出される (PPT: D 73a5, 102a2, 153b3) ことから、Candrakīrti → Avalokitavrata という年代順番が想定されるにも関わらず、PPT 中に Candrakīrti の思想内容に直接言及する箇所はこれまでに指摘されていない。実際にこの箇所でも大乗中觀論者として Candrakīrti の名前は挙げられていない。こうしたことから、丹治 [1988] (pp.214-215) などにおいて、Candrakīrti が Avalokitavrata に先行するという説に疑問が提示されている。またこの部分の訳出にあたっては、基本的には丹治氏の訳を援用させていただいた。丹治 [1988] p.214 参照。

(15) この訳注で示した番号は、上記の Avalokitavrata が示した世俗の特徴として述べた番号の内容と一致させてある。

(16) PPT では、「効果的作用が有能力であるもの」(arthakriyāsāmarthya) という表現は用いられておらず、チベット語訳から kriyākārasāmarthya 若しくは kāryakārasāmarthya という表現が用いられていたのであろうと、丹治氏によって想定されている。しかし、同氏が述べているように、これらの意味内容は基本的に同一であると考えて問題ないであろう。また、この有名なテクニカルタームを知らないという事実から同氏は Avalokitavrata の活躍年代が Dharmakīrti の活躍年代とほぼ同じか、或いはそれほど下っていないと推定している。丹治 [1988] p.215.

(17) 2003 年 3 月刊行の『印仏研』51-2 に掲載予定。

(18) 松下 [1984] pp.14-15 参照。また、松下氏はこの箇所で MAvBh の他に Dharmapāla の影響も示唆している。

(19) 今回筆者が調査した限りでは、この *avicāraprasiddha* (ma brtags na 'grub pa) という表現は、Bhāviveka の著書である MH, TJ, PPAd には見出せなかった。それ故に、これは Candrakīrti 以降の表現であると考えて構わないかもしれない。また、PPT には一箇所のみで

- あるが、以下のようにこの *avicāraprasiddha* という表現を用いる箇所を見つけることが出来る。'gro ba po yang gnyis su thal bar 'gyur ba de nges par bsal bar 'dod cing 'gag par 'dod pas tha snyad pa'i 'gro ba gcig kho na khas len cing zhes bya ba 'di lta ste / ma brtags na 'grub pa'i tha snyad pa'i 'gro ba gcig khas len cing ngo// (PPT: chapter 2, D wa 233a3-4; P [96] wa 269b6-7).
- (20) この他に PrasP: p.67 l.4 にも見出される。Yamaguchi [1974] 参照。
- (21) ただし、*Candrakīrti* の世俗の理解に関しては、凡夫の世俗と瑜伽行者の世俗と二つの設定があるなど、細部に関してはさらに検討を要する。また、*avicāraprasiddha* という表現は、MAvBhにおいてもこの他に数箇所見出されるが、その全てにおいて「幻」という喻えと関係をもっているわけでは決してない。
- (22)『雪域歴代名人辞典』(Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod), 甘肅民族出版社, 1992, pp.346-7 参照。又、この辞典において、この人物は 'Gos lo khug pa lha btsas と呼ばれている。
- (23) この MPA を著作した *Candrakīrti* がどの様な人物であったのかは定かではない。この MPA という論書には密教的な色彩は見られないが、共訳者である人物は密教論書の翻訳を数多く手がけていることもあり、密教論者である *Candrakīrti* と同一人物である可能性もある。
- (24) 稲見 [200], 久間 [1995], 松本 [1980a], [1980b], [1981] など参照。
- (25) Frauwallner [1961] pp.145-146 参照。
- (26) この訳にあたる部分のチベット語は mi rtag pa'i shes となっており、そのまま読めば「無常の知」となる所であるが、それでは意味が通らない。それ故、松本氏の指摘にあるように、[12] 対応する PVA の引用である [13] の内容と比較して *ma brtags pa'i shes* の意味であると理解する。松本 [1981] p.61, 注 (16) 参照。
- (27) テキストでは *avicārapramānam* となっているが、そのままでは読めないため、チベット語訳の *brtags pa ni tshad ma la* に基づいてこのように訂正して読んだ。註 (32) 参照。
- (28) 既に挙げた MAvT の [9] の記述においても同様に、「世間一般の認識」と〈表現〉とが並列に述べられていることが見出される。
- (29) Frauwallner [1961] pp.145-146 参照。
- (30) *Buddhapālita* も中論の注釈でこの教説を引用している。D [3842] 244b1 参照。
- (31) 江島氏によると、*Bhāviveka* が推論式の主張に「勝義において」とつけたのは、主に対論者からの次の三つの排撃をかわすためであったという。つまり「承認説（聖典）」「直接知覚」「一般的是認」である。その内の「一般的是認」という排撃に相当するのが、「世間一般の認識」という表現だったと考えられる。江島 [1980] pp.105-110 参照。例えば次の様な例が TJ に見出される。'di la gzugs kyi blo gang yin pa de ji ltar na yang dag pa ma yin par 'gyur te / mngon sum dang / lung dang / 'jig rten la grags pas gzugs kyi blo yang dag pa nyid yin par yang dag pa nyid ma yin pa bsal ba'i phyir rjes su dpag pa dang 'gal lo // (TJ: D 204a7-b1, P [96] dsa 225a2-3).
- (32) [13]において「考察されない知」が説明される際には次の様に注釈されていた。“yad apy uktam / *avicāraprattyartha* iti / *vicārapramānam* ucyate / na vikalpakanam vijñānam / tato 'pramānaprattyartha ity arthah /” この部分に相当するチベット訳は次の通りである。“ma brtags pa'i don ni kun rdzob kyi don yin no zhes gang bshad pa yang / brtags pa ni tshad ma la brjod kyi rnam par rtog pa'i shes pa ni ma yin no // des na tshad ma grags pa'i don yin zhes bya ba'i tha tshig go //” (PVA: D 171a3-4, P [182] te 202b6-7); これら両者を比較すると、*avicāra* は *ma brtags* そして *pratīti* は *grags* と訳されていることが分かる。

- (33) この部分は、次に示す MH chapter 2 - k° 10c に対する注釈部分である。zab cing rgya che mdo sde'i mtha' // 'don cing sdig pa bcom pa dang // bden pa gnyis la brten pa yi // rten cing 'brel 'byung nyid bshad zlos // (MH: D 3b4-5, P [96] dsa 4a2-3).
- (34) 今回筆者が調べた限りにおいては、この *ma brtags par grags* (*avicārapratti*) という表現は、*Bhāviveka* の PPPrad や MH には見出せず、この TJ にのみ見出されるようである。現存するチベット語訳の TJ の成立に関する問題については、既に江島氏によって指摘されており、この事実は TJ の成立の問題に関与している可能性を残しているようにも思われる。江島 [1980] pp.13-15 参照。
- (35) Frauwallner [1961] pp.141-144.
- (36) 松下 [1984] p.15 において、「考察に耐えられないもの」という世俗の特徴の起源が Dharmapāla まで遡れるとしているが、この事実からも恐らく TJ に見られる例がそれよりもさらに古いと考えられる。また、TJ には don dam par dpyad pa mi bzod pa'i phyir という「勝義としては吟味に耐えられない」という表現も見出される。TJ: D 83b4-5 参照。
- (37) 具体的な箇所については、AAJP: p.250 参照。この Jaina の Haribhadra の年代に関しては幾つかの先行研究がなされているが、Frauwallner [1937] において、この AAJP の中に Śākyabuddhi の PVT の引用が見出されることが指摘されており、少なくとも、700 年より前には遡れないであろうことが推測されるのである。この他にもこの人物の年代に関しては幾つかの論文が存在するが、その何れもが彼の活躍年代を 8 世紀中と想定している。Qvarnström [1999] pp.169-210 参照。
- (38) NBTT (p.30 II.8-17) において、意知覚の論証を行ったとされる *Jñānagarbha* が SDVV の著者であったとすれば、そこに〈表現〉が用いられている可能性も捨てきれないが、この点に関しては、船山徹氏によって、この *Jñānagarbha* の「意知覚」説と Śāntabhadra の「意知覚」説に類似性が見出せることが指摘されていることから、この「意知覚」について言及した人物を SDVV の著者とは別人と考える方が妥当かもしれない。Funayama [2001] 参照。また、ANDh & ANDhT や SDVV には「意知覚」に関する言及は見られない。
- (39) 丹治氏は梶山氏と同様 *Avalokitavrata* の活躍年代を 650 年頃と想定している。同氏は、梶山氏と同様の根拠（註の (15) 参照）の他、PPT 中に八大注釈家の名前が列挙される場合、注釈者の年代順に名前が挙げられているにも関わらず、*Candrakīrti* 名前のみがその活躍年代を無視した場所に挙げられていることから、彼の名前は後代の挿入の可能性もあると指摘している。丹治 [1988] p.248, 注 (208) 参照。
- (40) 実際には、羽田野氏は *Avalokitavrata* の活躍年代を 700 年代前半であると述べているが、同氏の挙げている *Haribhadra* の年代との比較を根拠とするならば、実際には 750 年頃と考えるのが妥当であろう。この *Haribhadra* は先に挙げた Jaina 教徒ではなく AAA の著者として知られている人物である。羽田野 [1952] p.166, A.Schiefner [1868] p.162 参照。
- (41) この論書は *Bhāvanāyogapatha* という異名でもチベット大藏經中に見出される。D 4538, P 5452.
- (42) このサンスクリットタイトルは、P 目録による。しかし、長沢氏は *Sramaśāmavidhi* というタイトルを挙げている。

(あかはね・りつ 大阪学院大学非常勤講師)